第百三十一話　精強な帝国陸軍師団も遂には案山子兵団と

帝国陸軍は言うまでもなく、歩兵師団を中核とした軍隊であり、その師団数の変遷等を見れば、日本陸軍の動員状況がクリアーになる。本土決戦を覚悟した際には、根こそぎ動員までしたが、その実態は悲しくなるばかりだ。案山子兵団と揶揄されたのも頷ける。

１　師団の種類

常設師団(甲師団編成)　4 個歩兵連隊制→3 個歩兵連隊の師団も

抽出した 3 個連隊で一個師団を編成

特設師団　　常備師団の留守部隊等を以て編成、3 個歩兵連隊制へ、100 番台の番号

治安師団（乙編成師団）　　大陸で治安維持に任ずる師団　約 12000 名

警備師団(丙編成師団)　　治安師団から砲兵力欠

丁編成師団　独立混成旅団から改編された師団　　独立歩兵大隊で編成

２　師団数の変遷

（１）支那事変勃発時点の師団数

17 個師団

（２）支那事変拡大に伴う師団の増強

欠番師団の復活と特設師団の新設

24 個→29 個→31 個→34 個→40 個（治安師団増設）→44 個(1939/6)

→48 個(＋8　－４)→50 個→51 個(1941/12)

（３）日米英蘭戦開始後

ア　総数 51 個、うち三単位師団が４４で四単位師団が 7 個

57 個（1942/2　+6 個独混旅団から改編）→58 個→60 個(1943/3)→70 個

→71 個→72 個→78 個（1944/4）→81 個→85 個(1944/6)→

94 個（+11 個、消滅 2 個(グァム、サイパン)）→96 個→97 個→105 個（1945/1）

イ　本土決戦用師団の増設

兵力の欠乏を補うため、満州や北方からの部隊転用が行われたほか、「根こそぎ動員」と呼ばれる現役兵から国民兵役に至るまでの大量召集と部隊新設が進められた。一応、沿岸配備師団と機動打撃師団に区分されていた。

根こそぎ動員は、以下の通り、大きく 3 回に分けて実施された。

・第一次兵備（1945 年 2 月 28 日）23 個増

・第二次兵備（４月 2 日と 6 日）11 個増

・第三次兵備（5 月 23 日）　19 個増　　その後消滅３個(沖縄、比)、増設８個

（４）終戦時

164 個師団(歩兵師団のみ)

３　日本陸軍の兵力推移(動員率 1930:0.75%、1940:4.6%、1944：10.3%とも)

1936:29 万　→1937:95 万　→1938：113 万　→1939：124 万　→1940：135 万

1941：185 万　→1942：210 万　→1943：365 万　→1944：398 万

終戦時　550 万人

４　本土決戦師団の実態

沿岸配備師団は特に、装備は貧弱で、「はりつけ師団」や「かかし兵団」と揶揄され、兵数・火力ともに劣っていた。戦士としての練度は低く、装備のいきわたらない弾薬の欠乏した徒手空拳に近い集団であり、銃剣 30%以下、小銃 40%以下、小縦弾 5%以下とも云われる。

＊　国家総力戦とは言え、斯くまでせざるを得なかったのかと慄然とする。

（第百三十一話　了）